

〈坊っちゃん〉と〈山嵐〉——明治維新をめぐる

徳永直彰

一、江戸と会津の共闘図式

江戸つ子は意気地がないと云はれるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ様がなくつて、仕方がないから泣き寐入りにしたと思はれちゃ一生の名折だ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲まんしゅう こうえいの後裔だ。

（夏目漱石『坊っちゃん』四 一九〇六—明治三十九年四月「ホトトギス」

↓『漱石全集 第二巻』一九九四年一月

「君は一体どここの産だ」

「おれは江戸つ子だ」

「うん、江戸つ子か、道理で負け惜みが強いと思つた」

「君はどこだ」

「僕は会津だ」

「会津つばか、強情な訳だ。（後略）」

（『坊っちゃん』九）

これらの部分をふまえ、平岡敏夫は、坊っちゃんを徳川幕府の幕臣、山嵐を会津藩士——つまり戊辰戦争における佐幕派の後裔と捉え、赤

* とくなが・ただあき、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本文学

シャツや野だいが象徴する新時代の立身出世コースから外れた弱者の姿を読みとつている（註二）。

小谷野敦は、『多田満仲』の関連から公平（金平）浄瑠璃や近松門左衛門『姫山姥』、『前太平記』などにも目を配り、坊っちゃんの幕臣的属性を浮き彫りにすることで平岡説を裏付けている。その上で、戊辰戦争においては勤王派（官軍）であり西南戦争では賊軍となり敗れた西郷隆盛に言及し、明治維新の進捗とともに佐幕派も勤王派も含めた「武士・武士的なもの」が敗北していく経緯と、新時代とそぐわない坊っちゃんと山嵐の姿を重ね合わせている（註三）。

小森陽一は、京都と繋がりのある「山城」という屋号を持つ質屋の息子・勘太郎と坊っちゃんの喧嘩や、御真影と教育勅語が置かれた宿直室での怠慢ぶりやバツタ（イナゴ）騒動を挙げ、坊っちゃんに潜在する賊軍Ⅱ佐幕派の怨念および天皇制イデオロギーへの違和感を見ている。その一方で、教師として赴任した坊っちゃんが「山城屋」という宿屋にひとまず泊まることを挙げ、特に当時の読者にとって「山城屋」という名前は、明治政府を主導する長州閥の長老・山県有朋が官費を長州出身の商人・山城屋和助に融通した汚職事件——返済不能に陥った山城屋和助の自殺が一八七二—明治五年、その後事件が発覚して山県は一時失脚——を想起させるはずだとした上で、坊っちゃんが教師という新時代ならではの職業を選択していることを捉えなおし、

坊っちゃんも山嵐も天皇中心の中央集権体制に絡め取られており、二人の反乱は「白虎隊と彰義隊の反復」にはなり得ない、ともしている^(註三)。

柴田勝二はこれらの論をふまえ、そもそも漱石の関心は過去ではなく現在および未来の日本と西欧の關係にあり、『坊っちゃん』に強く反映している史実も、戊辰戦争というよりむしろ日清・日露戦争である、という見解を述べている^(註四)。うらなりの送別会で野だいこが日清戦争に関する俗謡『欣舞節』を歌うと坊っちゃんが『日清談判なら貴様はちやんちやんだらう』(九)とどやして殴りつける場面、また、赤シャツがやたらとロシア文学に言及する釣りの場面(五)などを挙げ、うらなりからマドンナを引き離そうとする工作は三国干渉に、坊っちゃん・山嵐による赤シャツ・野だいこへの制裁は日露戦争に通ずる、と。また柴田は、坊っちゃんに幕臣でない要素も見ている^(註五)。坊っちゃんが自認する「無鉄砲」(一)ぶりというのも、榎本武揚や小栗上野介など国際情勢に明るく開国への意志を持っていた幕臣より、むしろ薩摩・長州を代表とする倒幕勢力がおこなった無謀な攘夷行動(薩英戦争・下関外国船砲撃)に通ずるものであるとした上で、作品の中心盤、坊っちゃんが引つ越していき、主人夫婦に良い印象を抱きもする下宿屋の名前「萩野」の「萩」は、明治維新を牽引する吉田松陰・高杉晋作・桂小五郎(木戸孝允)らを輩出した長州の中心地・萩と通ずることを指摘する。また、新時代における欧米列強への追従のシンボルのような文学士・赤シャツにも漱石自身の投影がみとめられ、他ならぬ坊っちゃんも温泉に持ってゆく手ぬぐいの柄(赤い縞模様)から「赤手拭」と生徒に呼ばれてしまうことを挙げ、赤シャツと赤手拭い(坊っちゃん)に「密かな共通項」を見ることができ、とも述べて

いる。

柴田が指摘する、過去(戊辰戦争)よりも現在・未来(日本の近代化と主として西欧との国際關係など)へ向ける漱石の思いが『坊っちゃん』にも反映しているはずだという見解は、『坊っちゃん』の時代設定からしても^(註六)一定の説得力を持っている。漱石の談話「僕の昔」(一九〇七―明治四十年)にも『赤手拭をさげてあるいたことも事実だ』とあり、坊っちゃんと赤シャツに相同性をみる見解も妥当といえる。

しかし、平岡・小谷野・小森らが論の前提とする、坊っちゃんが「江戸」出身、山嵐が「会津」出身ということは『坊っちゃん』本文で明示されており、これを全く退けることは難しく、戊辰戦争における江戸幕府・会津藩の共同關係が坊っちゃん・山嵐の關係に何らかの反映を与えているという見解もやはり無視できない。

そこで本論では、「維れ新たなり」(『詩経』「大雅、文王」)の原義に立ち返り、「明治維新」を幕末の争乱にはじまり戊辰戦争・明治新政府設立・西南戦争・欧化政策・日清日露戦争にいたる「新時代」の経緯全体として考え、明治の世に生きる武士の末裔として坊っちゃんと山嵐を捉えなおし、その人物像および漱石がおこなったであろう人物造形に関する分析をおこなう。

二、山嵐と西郷四郎 ―近藤哲の見解

うらなりの送別会の前に交わされる坊っちゃんと山嵐のやりとりで、以下のくだりがある。

あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云ふと、ちや

んと逃道(にげち)を拵(こしら)へて待つてるんだから、余つ程奸物だ。あんな奴にかゝつては鉄拳制裁でなくつちや利かないと、瘤(うぶ)だらけの腕をまくつて見せた。おれは序(ついで)でだから、君の腕は強さうだな柔術でもやるかと聞いて見た。すると大将(たいしょう)の腕へ力瘤(ちからうぶ)を入れて、一寸攫(つか)んで見ると云ふから、指の先で揉んで見たら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。(原文改行)おれは余り感心したから、君その位の腕なら、赤シヤツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだらうと聞いたら、無論(もちろん)さと云ひながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤(ちからうぶ)がぐるりと皮のなかで廻(まわ)転(てん)する。頗(たが)る愉快(えき)だ。山嵐(さんらん)の証明する所によると、かんじん縋(す)りを二本より合せて、この力瘤(ちからうぶ)の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぶつりと切れるそうだ。

〔坊(ぼう)つちゃん〕九

この部分をあらためて読むと、山嵐(さんらん)の腕力(うでぢから)について多くの字数が費やされていることがわかる。「柔術(じゆじゆ)でもやるか」という坊(ぼう)つちゃんの問いかけに山嵐(さんらん)が答えることはないが、少なくとも否定はしていない。

このやりとりを手掛かりに、近藤(こんどう)哲(てつ)は山嵐(さんらん)のモデルを講道館(こうどうくわん)柔道(じゆうだう)の西郷(せいこう)四郎(しろう)ではないかと推測(すいそく)している(註七)。以下、論者(ろんしや)〔徳永(とくなが)〕による補足(ほぞく)も加えつつ、近藤(こんどう)説(てい)の概要(がいがい)を列記(れいき)する。

山嵐(さんらん)のモデルⅡ西郷(せいこう)四郎(しろう)……山嵐(さんらん)のモデルは、漱石(しゆくせき)の赴任(しゆにん)した愛媛(えひめ)県尋常(けんじん)中学(ちゆうがく) (のちの松山(まつやま)中学)の数学(すうがく)教師(きょうし)で松山(まつやま)出身(しゅしん)の渡部(わたべ)政和(せいわ) (註八)ではなく、講道館(こうどうくわん)柔道(じゆうだう)草創(くそうくわう)期(き)における「四天王(してんおう)」の一人で、得意(ていぎ)技(ぎ)「山嵐(さんらん)」で巷間(ちやうかん)にも知られた西郷(せいこう)四郎(しろう)ではないか。西郷(せいこう)四郎(しろう)は会津(あいづ)の出身(しゅしん)で、旧会津藩(きうかいづはん)家老(けらう)・西郷(せいこう)頼母(たのちか) (註九)の養子(やしん)である。戊辰(ごしん)戦争(せんそう)における会津藩(かいづはん)敗戦(ばいせん)時(とき)、近藤(こんどう)の妻子(しよし)二十一人(にじゅういちにん)が集団(しゆたい)自決(じけつ)したことは、白虎(はくこ)

隊(たい)とともに幕末(まくまつ)会津(かいづ)の悲劇(ひがく)として知られる。西郷(せいこう)四郎(しろう)は後に富田(とみだ)常雄(じょうゆう)の小説(せうた)『姿三四郎(すが三四郎)』(一九四二―昭和(しやうわ)十七年)の主人公(しやうじんくわ)のモデルとなり、得意(ていぎ)技(ぎ)「山嵐(さんらん)」も同小説(どうせうせうた)で描(えが)かれたが、それ以前(いぜん)に、漱石(しゆくせき)が『坊(ぼう)つちゃん』の中で四郎(しろう)をモデルに「山嵐(さんらん)」を描(えが)いていたのではないか。漱石(しゆくせき)が西郷(せいこう)四郎(しろう)を知るきっかけとしては、嘉納(かの)治五郎(ぢごろう)ならば皆川(みながわ)正禎(せいぢん)との交流(かうりゆう)が考えられる。

漱石(しゆくせき)と嘉納(かの)治五郎(ぢごろう)……西郷(せいこう)四郎(しろう)の師(し)で講道館(こうどうくわん)柔道(じゆうだう)を創始(そうし)した嘉納(かの)治五郎(ぢごろう)は、東京帝国(とうきやうていこく)大学(だいがく)出身(しゅしん)の教育者(きやういくしや)でもあり、教師(きょうし)としての漱石(しゆくせき)と繋(つな)がりがある。嘉納(かの)は講道館(こうどうくわん)を発展(はつてん)させていくと同時に、学習院(がくしんいん)教師(きょうし) (一八八二―明治(めいし)十五年)と、熊本(くまもと)五高(ごこう)校長(けいしやう) (九一年)と、高等師範(こうとうしはん)校長(けいしやう) (九三年)を歴任(れきにん)するが、高等師範(こうとうしはん)校長(けいしやう)時代(じだい)、漱石(しゆくせき)を教師(きょうし)として採用(さいよう)している(一八九三―明治(めいし)二十六年)。その面接(めんせつ)時のやりとりが漱石(しゆくせき)のエッセイ「処女作(ぢよじよさく)追懐談(しゆわいたん)」(一九〇八―明治(めいし)四十一年) (註一〇)、講演(こうげん)「私の個人主義(わがしのこじんしゆぎ)」(一九一四―大正(たいしやう)三年) (註一一)で述べられているが、『坊(ぼう)つちゃん』(一九〇六―明治(めいし)三十九年) (註一二)にも生(な)かされている。嘉納(かの)の校長(けいしやう)就任(しゆにん)とともに、高等師範(こうとうしはん)では学生(がくせい)有志(よし)への柔道(じゆうだう)指導(しゆどう)が始(はじ)まったが、漱石(しゆくせき)もそれを見聞(けんぶん)したと思われる。また、嘉納(かの)が校長(けいしやう)を務(つと)めていた時期(じき)ではないが、漱石(しゆくせき)は愛媛(えひめ)県尋常(けんじん)中学(ちゆうがく)を辞任(じにん)したあと熊本(くまもと)五高(ごこう)に赴任(しゆにん)しており(一八九六―明治(めいし)二十九年)、その柔道場(じゆうだうじやう)「瑞邦(すいぱう)館(くわん)」など、嘉納(かの)の柔道(じゆうだう)を通じて影響(えいぎやう)力(りき)を見聞(けんぶん)したと思われる。なお、一八九一―九四年(きゅうしやう)のあいだ熊本(くまもと)五高(ごこう)で教鞭(きやうべん)をとっていたラフカディオ・ハーン (小泉(こいずみ)八雲(はつうん))のエッセイ「柔術(じゆうじゆ)」(一八九五―明治(めいし)二十八年)の冒頭(ぼうとう)では「瑞邦(すいぱう)館(くわん)」のことが語(かた)られているが、道場(みちじやう)の壁(かべ)に、会津(かいづ)の白虎(はくこ)隊(たい)の絵(え)と、旧会津藩(きうかいづはん)士(し)の漢文(かんぶん)教授(きやうしゆ)・秋月(あきづき)胤永(いんえい) (梯次郎(はしじらう))の絵(え)がかかっているとある(註一三)。漱石(しゆくせき)がこの絵(え)を見たか否(いな)かは不明(ふめい)だが――近藤(こんどう)が旧熊(きうくま)

本五高—現在の熊本大学を訪ねたさいも絵の所在は不明だったという——、『坊っちゃん』発表の約三年後に書かれた漱石の紀行文「満韓ところどころ」に白虎隊への言及がみられ^{註一四}、「会津つば」の記憶が鮮明だったのかとも思える。

漱石と皆川正禧……東京帝国大学文学部英文学科で漱石に教えを受け、その後も漱石と親しく親交をもった門下生で、漱石没後の一九二四—大正十三年には漱石の東大における講義のノートを『英文学形式論』として出版した皆川正禧は、現在の新潟県東蒲原郡(旧会津藩領)に生まれた。皆川家は西村八幡宮の神官を代々務めた土族で、血縁には戊辰戦争で戦った藩士もいた。一方西郷四郎も、会津若松生まれだが戊辰の戦乱によつて移住を余儀なくされ、物心つく頃(詳細は不明だが二、四歳頃)には東蒲原郡に定住、事実上の故郷となったので、正禧と四郎は同郷人ということになる。西郷四郎は十五歳の時(一八八〇—明治十三年)、のちに皆川正禧が入学する(八五年)津川小学校で代用教員を勤めていたこともあり——正禧が入学したとき四郎はすでに講道館の柔道家として活躍していたので直接の交流はない——、正禧は同郷の有名人として四郎を認識していたことだろう。正禧は一九〇三—明治三十六年の大学卒業後すぐ明治学院高等部の英語教師となり、その後一九〇八—明治四十一年に鹿兒島七高へ移るまでの五年間、特に漱石と深い親交を結んだが、この時期は『坊っちゃん』執筆の時期と重なる^{註一五}。そもそも漱石はスポーツや武術を好んでいた^{註一六}で、正禧が同郷の武術家である西郷四郎のことを漱石に語った可能性は高い。なお『三四郎』には、「学科以外に柔術の教師」もしていた「地方の中学」を辞職した男が登場するが^{註一七}、柔術と中学の辞職という要素からして、この男は『坊っちゃん』の登場人物である山嵐

の分身というべきであり、逆にいえば、山嵐と柔道の繋ぎの強さを裏打ちする。

三 柔道と新時代——漱石と新時代

前項で見た近藤哲の説も、他の諸説と同じく『坊っちゃん』本文と資料をつき合わせた上での解釈ではあるが、多くの傍証に支えられており、論者(徳永)も妥当と考える^{註一八}。

だが、山嵐のモデルは西郷四郎説に則つて『坊っちゃん』を読み進めた場合、にわかに理解しがたい箇所がある。他ならぬ赤シャツ・野だいこへの制裁場面である。この場面で山嵐が駆使するのは、坊っちゃんと同じ「拳骨」による殴打であり、肝心の柔道技(投げ技・固め技)が出てこない^{註一九}。

「だまれ、」と山嵐は拳骨を食わした。赤シャツはよろよろしたが「是は乱暴だ、狼藉である。是非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」(原文改行)「無法で沢山だ」とまたばかりと撲くる。「貴様の様な奸物はなぐらなくつちや、答へないんだ」とほかほかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。仕舞には二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちらちらするのか、逃げ様ともしない。(原文改行)「もう沢山か、沢山でなけりや、まだ撲つてやる」とほかんぽかんと兩人でなぐつたら「もう沢山だ」と云つた。野だに貴様も沢山かと聞いたら「無論沢山だ」と答えた。」

(『坊っちゃん』十一 傍点徳永)

ここにみられる殴打にしても、坊っちゃんと山嵐のそれは特に区別なく描かれており、この場面をみる限りでは、山嵐が柔道どころか武術の遣い手であること自体が読みとりにくい。この「矛盾」について近藤は言及していないが、前項で引用した部分に関して、《「柔術でもやるか」と坊っちゃんが尋ねているように、山嵐は柔術家であつてもおかしくありません。「いやあ、山嵐投げでずいぶんならしたもんだ」とでも、山嵐が答えてくれたなら、山嵐は文字どおり「会津っぼ」であることが証明されるのですが。》と述べている（前掲『漱石と會津っぼ・山嵐』第三章）。

たしかに、坊っちゃんが口にする「柔術」という言葉は、山嵐と柔道（柔術）との繋がりを常に暗示し続ける。制裁場面で柔道技を山嵐が駆使すればたちどころに西郷四郎と結びつけられてしまうことを漱石が予想し、柔道技と基本的に無縁の殴打を選んだ、ということも考え得る。だが、山嵐が柔道を使わないことが矛盾ではなく、むしろ当然の成り行きとも考え得る材料がある。西郷四郎の後半生である。

一八九〇—明治二十三年、西郷四郎は丸八年間在籍した講道館を突如無断出奔し、追放処分を受けている^{註一〇}。四郎出奔の理由には諸説あるが、その一つに、当時の若者の間に広まっていた「大陸雄飛」への思いがあつたというものがある。事実、出奔のさい講道館には詫び状とともに「支那渡航意見書」という文章を残し、その後中国に在住した時期も推測されているが、「雄飛」というほどの活躍をした形跡はない。一九〇二—明治三十五年には、中国革命の支援者であつた鈴木天眼とともに長崎で「東洋日の出新聞」創刊に参画、編集責任者となり、孫文と交流したり、一九一一—明治四十四年の辛亥革命の折には上海・武漢・漢口などから現地取材記事を送つたりもしたが、一九二

二—大正十一年に没するまで、不遇のまま過ごした印象が強い。

もう一つの説は、義父・西郷頼母近慮と嘉納治五郎との間で板挟みになつたことを理由とするものである。四郎は講道館屈指の実力者であり、当然講道館の将来を担う人材と目されていたはずであるが、四郎の義父・西郷近慮は、会津藩に伝わる大東流合気柔術の伝承者であり、そもそも四郎を養子に迎えたのも、その宗家を継いでもらいたい思惑があつたのではないかと牧野は推測している（前掲註二〇）。即ち四郎は、恩師である嘉納（講道館柔道）と義父である近慮（大東流合気柔術）の板挟みに悩み、講道館を去つたというのである。四郎は、先に述べた経歴の合間（一八九四—明治二十七—翌年）に仙台二高の柔道師範や久留米の南筑私学校柔道師範を短期間務めてはいるが、講道館に戻ることはなく、大東流合気柔術宗家を継ぐこともなかつた。本論は、こちらの説に重点をおいて考察を続けたい。

大東流合気柔術は江戸時代以前から続く古武術（古流柔術）であり、新時代の体育として発展していつた柔道とは対照的である。柔道は古流柔術を土台にしつつもそれらとは一線を画し、技や練習方法に西歐的な合理性や科学的説明（テコの原理・重心理論など）が導入され、乱取り（練習試合）や試合などのスポーツ的な要素が前面に出されたことや、講道館主催の雑誌^{註二二}によるアピールもあり、爆発的に普及した。事実、創始者である嘉納治五郎は、「柔術」と「柔道」をはっきり区別している^{註二二}。

つまり西郷四郎は、旧時代の武術である大東流合気柔術と、新時代の武道である講道館柔道の間立ち、双方から逃亡したということになる。ちなみに、西郷四郎の講道館出奔の八年後、大東流合気柔術は会津人である武田惣角に伝承された^{註二三}。その後、武田惣角の弟子で

あつた植芝盛平が創始した合気道は、講道館柔道に準ずる普及率をほこる武道に発展する。前掲牧野『史伝 西郷四郎』は、西郷四郎の得意技・山嵐を「明治の青春の象徴」としているが、現在も隆盛をほこる講道館柔道と合気道の成立に大きく関わりながら、伝統武術家としても新時代の武道家としても大成できなかった四郎の後半生は、敗北者のイメージに深く彩られている。

講道館出走後の西郷四郎について、漱石がどの程度認識を持っていたかは定かではないが、少なくとも『坊っちゃん』執筆の時点で四郎は講道館にはおらず、得意技「山嵐」で知られた英雄・西郷四郎のイメージが敗北者のそれに転じたという印象は持っていたのではないか^{註三四}。そして、日本古典文学・漢文学の基礎に接ぎ木するように新時代の必須教養としての英文学を学びながらも教育者としての生き方を捨てつつあつた『坊っちゃん』執筆当時の漱石は、ほぼ同年代に生まれ^{註三五}、古流柔術に西欧の合理精神を取り入れ発展した新時代の「武道」である柔道の遣い手として名を馳せながら「敗北者」となつた西郷四郎に対し、同志的連帯感を抱いたのではないだろうか^{註三六}。このように考えると、赤シャツ・野だいご制裁の場面で山嵐が柔道技を使わないのも、「矛盾」ではないと思えるのである。

漱石が西郷四郎に連帯感を抱いたとすれば、柔道の創始者にして新時代の教育者である嘉納治五郎が共通の「敵」——〈校長―狸〉として仮想されても不思議ではない。その意味で、『坊っちゃん』における校長が今ひとつ悪玉然としていないのは、漱石の中に嘉納個人に対する恨みがなかつたことの反映と考えれば首肯できる^{註三七}。実在する嘉納治五郎をモデルとする（前掲註一〇〜一二参照）校長―狸を完全な「悪玉」に仕立てることを避けつつ、坊っちゃんと山嵐が——そして

作者漱石が——遠慮なく叩きのめすことのできる完全な「悪玉」が必要となり、漱石自身の西欧的教養・新時代の志向を戯画化した赤シャツとその手下・野だいごが創造されたのではないだろうか^{註三八}。第一項でみた柴田勝二の説が指摘する坊っちゃんと赤シャツの同性、そして、野だいごが坊っちゃんと同じ江戸出身であるという設定は、このような創作上の要請という観点からも説明できる。

四 明治維新のねじれと『坊っちゃん』

「坊っちゃん—江戸／山嵐—会津」という戊辰戦争における共闘図式は、前項で見た西郷四郎と講道館柔道の関係に加え、これも皆川正禧から聞いたであろう西郷四郎＝会津出身の出自と、江戸出身という漱石自身の出自によって呼び起こされ、新時代から脱落してゆく二人の歴史的背景として『坊っちゃん』に生かされたのだと思われる^{註三五}。だが坊っちゃんと山嵐には、江戸と会津の共闘図式のみにとどまらない歴史的表象も描き込まれている。

おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事を、其代り何によらず長持ちのした試しがない。如何に天誅党でも飽きる事には変りはない。

（『坊っちゃん』十二）

漱石全集（岩波書店）や多くの文庫版の注釈では、上記「天誅党」を幕末の天誅組のことであるとしている。天誅組の変は、一八六三—文久三年に起こつた尊王攘夷派による大和国五条の代官所襲撃事件で、中心人物の中山忠光は公家（姉は孝明天皇の后）、吉村寅太郎は土佐脱

藩浪士である。即ち、戊辰戦争の「勤王倒幕—官軍／佐幕—賊軍」図式からいえば天誅組は官軍であり、のち賊軍となる江戸幕府・会津藩とは立場を異にする。このことをふまえ、坊っちゃん・山嵐と天誅組が結びつけられていることに對し、小森陽一と半藤一利は違和感を表明している^{註三〇}。

だが、天誅組が志半ばで敗北したことを想起すると、敗れて去っていく坊っちゃんと山嵐の成り行きとまったく矛盾するわけではない。そもそも戊辰戦争における官軍・賊軍というのも、幕末の争乱の末期に起こった鳥羽伏見の戦い（一八六八—明治元年）以降前者が天皇の後盾を完全に得たこと、戦鬪に勝利したことによる分類である。それ以前の倒幕派と佐幕派の違いは、徳川政権の存続の是非および開国政策の是非にあり、尊皇思想自体は両派に共有されていた。即ち、「尊皇攘夷倒幕派」と「尊皇開国佐幕派」の争いが、明治維新の端緒となる幕末の争乱の実相である。「官軍・賊軍」の別はむしろ尊皇思想に起因するものだが、だからといって、敗れることで賊軍と確定した佐幕派が反尊皇（天皇）思想を持っていたということではない。いいかえれば、倒幕派・佐幕派の違いというのは尊皇思想の実践にあたっての方法論的な違いにすぎず、いずれの党派であつても、争乱の敗北者は尊皇思想の実践——それが当時の「武士道」にほかならない——に失敗した者であるという意味では共通しているのである。

山嵐が呟く「might is right」——「強者の権利」（『坊っちゃん』四）は、上記のごとき戊辰戦争の実質と響き合う。もちろんそこに、「勝てば官軍」——佐幕派が勝てば彼らが官軍であつたという意味をふくめ——という訳を与えても良いだろう。坊っちゃんと山嵐が「官軍」である天誅組と結びつけられているとすれば、彼らの出自が江戸と会津

という「賊軍」であることはふまえつつも、佐幕派と倒幕派が戦争の勝敗だけで官軍と賊軍（善玉と悪玉）に分かれたれ、倒幕運動を支えた攘夷思想が突如開国思想に切り替えられた明治維新の矛盾や欺瞞——いわば「ねじれ」が込められているからではないだろうか。

「九」で山嵐が踊る劍舞^{註三二}も、同種のねじれが見てとれる。劍舞の歌詞は、幕末の勤王家・齋藤監物の「題児島高德書桜樹図」という漢詩である^{註三三}。隠岐島に流される後醍醐天皇の救出に失敗した児島高德が桜の木に嘆きの言葉を彫った、という故事を描いた絵を題材として齋藤が書いたもので、やはり勤王の志を歌っている。近藤哲は、この漢詩の内容と幕末の会津藩における勤王の志とを重ね合わせるにとどまっている（前掲『漱石と會津つば』第三章）が、この漢詩の作者・齋藤監物自身にも注目すべき要素がある。齋藤は水戸藩出身で、一八六〇—万延元年、桜田門外で徳川幕府大老・井伊直弼を暗殺して闘死した浪士の一人なのである。水戸藩は、幕末の尊皇攘夷運動の先駆的な存在で、二代藩主・徳川光圀が始めた『大日本史』編纂の影響もあり、尊皇攘夷イデオロギーの淵源ともいえる。徳川御三家の一つでもあるこの藩が幕末における討幕運動の素地を準備したこと、事実、齋藤監物ほか水戸浪士十七名（薩摩浪士も一名参加）が徳川幕府の大老を暗殺したことを考えると、ここにも明治維新の——明治維新にいたって噴出する——ねじれが表れているように。

なお、註一七で挙げた漱石の「断片 明治三十四年」の中にある「弘道館」は明らかに柔道の「講道館」の誤記だが、水戸藩の藩校の名前は「弘道館」という^{註三四}。漱石の中で、「弘道館」と「講道館」が語呂だけでなく、齋藤監物と西郷四郎を経由することで闘死する武士のイメージとしても重なり、それが山嵐の劍舞となつて表れたのか

もしれない。

また、山嵐の剣舞の直後に出てくる俗謡『欣舞節』も見逃せない。まずこの歌の一番の歌詞全体を見てみよう。

日清談判 破裂して（引用者註：『坊っちゃん』本文ではここまで）品川乗り出す 吾妻艦 西郷死するも 彼がため 大久保殺すも彼奴がため 遺恨かさなる ちゃんちゃん坊主^{註三四}

この歌を歌い出した野だいを坊っちゃんが『日清談判なら貴様はちゃんちゃんだらう』（九）とどやして殴る場面は第一項の柴田説の検討でも見た。このとき野だいが歌詞のどこまで歌い続けていたかは不明だが、野だいを「ちゃんちゃん」に当てはめて殴っていることから、坊っちゃんはこの歌の一番の歌詞全体をもとと知っていたか聞いたばかりであり、「吾妻艦」に自らを仮託していることになる。

半藤一利は、上記の歌詞に出てくる「吾妻艦」が正式には「東艦」であり、一八八八―明治二十一年に廃艦になっていて、日清戦争には参加していないとした上で、この戦艦がたどった数奇な経緯を解説している。もともとこの戦艦は、幕末に徳川幕府がアメリカから購入したものを明治新政府が召上げたもので、当時は「甲鉄艦」と呼ばれていた。その名の通り鉄の装甲で覆われた当時最新鋭の戦艦で、函館五稜郭に籠もった榎本武揚率いる幕府側の艦隊を散々に打ち破った。

「アズマカン」は明治期の日本人にとって懐かしい艦名であり、『欣舞節』の作詞者若宮万次郎もその勇名を惜しんで歌詞に取り入れたのだろうと半藤は推測している^{註三五}。

即ち「吾妻艦（東艦）」は、第一項で見た柴田説も指摘していた徳川

幕府の開明的側面や開国政策を象徴するような存在であったはずが、実際には、もともと攘夷（外国排斥）を唱えていた倒幕派の戦艦として活躍した、というねじれを抱えているのである。（幕軍側もこの艦を「奪われた」という意識が強かったのか、宮古湾海戦では接舷斬り^{アボル}込み攻撃による奪取作戦を敢行、失敗におわっている。）

西郷隆盛の名が登場することも注目される。西郷隆盛は、倒幕派・官軍として戊辰戦争を戦い、明治新政府の実力者となったが下野、西南戦争では賊軍として敗死するという、ねじれを体現している。第一項でも検討した小谷野敦の説は、坊っちゃんと山嵐の敗北が、明治維新が進む過程で倒幕側も佐幕側もふくめた「武士」全体が敗れ去っていくことと通じているとして西郷隆盛にも言及、「最期のサムライ」と位置づけているが^{註三六}、西郷隆盛と西郷四郎は、姓の一致によっても、また、敗北していく武士像によっても、容易に結びつく^{註三七}。

漱石は「満韓ところどころ」（『坊っちゃん』発表の約三年後）で友人の佐藤友熊を会津藩の白虎隊になぞらえているが（前掲註一四）、佐藤は薩摩人である（註一四引用部分の直前で漱石は佐藤を「薩州人」と述べている）。また、平岡敏夫は『坊っちゃん』の山嵐のモデル候補として、漱石のロンドン留学時代の友人の化学者・池田菊苗を挙げているが^{註三八}、池田もまた薩摩出身である。さらに、漱石が職業作家に転じる契機をつくった朝日新聞（漱石入社は一九〇七―明治四十年五月）の主筆・池辺三山の著書（岩倉具視・大久保利通・伊藤博文に関する史論）に寄稿した序文にも、池辺の巨漢ぶりから西郷隆盛を連想したという初対面時の回想と、池辺がすでに故人でかねて期待していた西郷隆盛論を読めなくなったことが述べられた後、〈若し余の幻覺を極端に引き延ばす事を許すならば、余は池辺君と西郷を一人と見做

して、其西郷の池辺から大久保や岩倉の批評を聞いてゐる心持でゐたのだから、或は西郷論の出来なかつた方が、偶然ながら詩的には余にとつて面白いかも知れない」とある^{註三五}。池辺が西南戦争で西郷軍に参加した旧熊本藩士・池辺吉十郎の子であることにも言及されており、明治維新史ならびに西郷隆盛への漱石の関心の深さが窺えるとともに、人物を他の人物に擬する発想法が漱石にあることが確認でき、西郷隆盛と西郷四郎の間でも同じ発想が働いた可能性を示唆する。これらのことから、漱石の中で、薩摩と会津という戊辰戦争における仇敵関係が「西郷」の姓によつて奇妙に中和され、敗北していく武士の全体像を作り上げていたとはいえないだろうか。

なお『欣舞節』の歌詞全体は清国批判に満ちているが、西郷隆盛の死も大久保利通の死も清国とは関係がなく、「言い掛かり」というほかない。吾妻（東）艦、西郷隆盛と同じく、これもまた明治維新における脱亜入欧思想のねじれ——の露呈にはかならず、第一項でみた小森説・柴田説が指摘する、坊つちやんと山嵐が示す矛盾——江戸・会津出身の自恃と、薩摩・長州が主導する新時代の教育を受けて教師になつてゐること——や、赤シャツや野だいこに対する制裁の半ば理不尽な暴力性とも通底してゐるだろう。

以上のように、漱石は、坊つちやんと山嵐に様々な要素を盛り込み、明治維新のねじれに巻き込まれ排斥された敗北者の姿を見事に描き出している。本論で中心的に扱つた「坊つちやん」江戸「山嵐」会津「西郷四郎」という図式もまた、多くの要素の一つによるものであり、他にも見るべき要素があることは、天誅組や桜田門外の変、そして西郷隆盛に関する分析を通じて既に述べたとおりである。人物という小さな器に多重多角の要素を盛り込む漱石の想像力と筆力は縦横

無尽で、いまだ底知れぬ躍動感に満ちている。

付記

西郷四郎をモデルとした富田常雄『姿三四郎』（一九四二—昭和十七年）と、漱石の『三四郎』（一九〇九—明治四十二年）の主人公の名前が共に「三四郎」であることについて、『史伝 西郷四郎』の著者・牧野登は、『坊つちやん』の山嵐のモデル「西郷四郎説を述べた文章の中で、『富田常雄の三四郎と漱石の三四郎は多分偶然の一致』であろう」としている^{註四〇}。富田常雄は、西郷四郎と同じ初期講道館四天王の柔道家・富田（旧姓山田）常次郎を父に持ち、少年小説・少女小説家として出発、大衆娯楽小説家として名を成した経歴の持ち主だが、学生時代は父の柔道場で師範代を務めながらもゾラやモオパッサン、ドストエフスキーなどを愛読する作家志望の文学青年であり、漱石作品に接していない可能性の方が低い。その富田常雄が『坊つちやん』を読めば「山嵐」の名に西郷四郎の影を見ること、『三四郎』を読めば註十七で挙げた柔術（柔道）の場面に特別の関心を抱くことは必至であろう。また、漱石の『それから』を富田常雄が読めば、主人公・長井代助の恋敵の名前——平岡常次郎と自分の父親・富田常次郎の名前が同じであることに当然気づき、『坊つちやん』の山嵐に連想が働くことも十分に推測できる^{註四一}。富田常雄自身は「姿三四郎」のネーミングと漱石作品との関連について何も発言していないようだが^{註四二}、以上の諸要素と、若者が志を抱いて上京してくるという物語の起点や西欧化に戸惑う人々の姿などの共通点を勘案すると、「姿三四郎」の名は漱石の「三四郎」から名付けられたと思えてくる。決定的な論拠には欠けるが、仮説として提示しておきたい。

註

- (一) 平岡敏夫 『坊つちちゃん』 試論——小日向の養源寺』(『文学』一九七一年一月↓塙書房 『坊つちちゃん』の世界』一九九二年)
- (二) 小谷野敦 『坊つちちゃん』の系譜学——江戸っ子・公平・維新』(中公新書 『夏目漱石を江戸から読む 新しい女と古い男』一九九五年)
- (三) 小森陽一 『矛盾としての『坊つちちゃん』』(翰林書房 『漱石研究 第二十号特集 『坊つちちゃん』』一九九九年)
- (四) 柴田勝二 『戦う者』の系譜——『坊つちちゃん』における(戦争)』(花書院 『叙説II—08』二〇〇四年八月)
- (五) 前掲小森陽一の説も、坊つちちゃんに「幕臣」以外の属性を若干見ているが、柴田説はそれを論の主軸に置いて強調している。
- (六) 『坊つちちゃん』には具体的な年代の記述がないが、平岡敏夫は「『坊つちちゃん』評釈」(『国文学』一九七九年五月↓前掲 『坊つちちゃん』の世界)や「ただ一本の蜜柑の木」(『日本の文学』第八集 一九九〇年十二月↓前掲 『坊つちちゃん』の世界)で、この小説の主な舞台を一九〇五—明治三八年ごろと推測している。論拠を以下に整理する。
- ① 日露戦争(一九〇四—明治三十七年二月↓翌年九月)への言及があり——『天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだらう』(三)り——、戦争の「祝勝会」らしき行事が描かれている(十)ことから、小説の舞台は一九〇五—明治三八年九月以降である。
- ② 清が『今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた』とあり(十一)かつ作品の発表が一九〇六—明治三十九年四月であることから、清

が死んだ「今年」とは一九〇六—明治三十九年である。(この作品が発表年以降の未来を描いている可能性を切り捨てて考えた場合。)

なお秦郁彦は『漱石文学のモデルたち』(講談社二〇〇四年十二月)で、この作品の舞台のモデルとおぼしい松山中学に漱石が在任していた間(一八九五—明治二八年四月から丸一年)に日清戦争(一八九四—明治二七年八月↓翌年四月)の祝勝会があったこと、『坊つちちゃん』の記述と同じような乱闘事件も起こったことなどを挙げ、漱石はそれらの体験を十年後に「タイムスリップ」させたのだろうと推論している。

(七) 『皆川正禧と夏目漱石』(阿賀路の会 『阿賀路 第二十二集 一九八二年三月)および『漱石と會津っぼ・山嵐』(歴史春秋出版社 一九九五年)

(八) 山嵐のモデルは渡部政和というのは地元の松山をはじめとして半ば定説となつているという。その他、漱石が松山で見知った人々と『坊つちちゃん』のモデル問題に関しては、前掲秦 『漱石文学のモデルたち』を参照。なお近藤は漱石の談話「僕の昔」も挙げている。『松山中学にあの小説の中の山嵐といふ^{あだ}綽名の教師と、寸分も違はぬのがあるといふので漱石はあの男のことをかいたんだといはれてるのだ。決してそんなつもりぢやないのだから閉口した。』(『僕の昔』一九〇七—明治四十年二月「趣味」二巻二号所収 ↓『漱石全集 第二十五巻』一九九六年五月 引用は徳永による。)

(九) 四郎の生家・志田家も会津藩士の家系で、実父の志田貞二郎は戊辰戦争に参加、敗戦後も生きのびた。一八六六—慶応二年生まれの四郎は八二年に上京、講道館に入門し、戊辰戦争後祖先の旧姓「保科」を名乗っていた^{ちかひ}近慮の養子となり(八四年)、八八年に西郷家を

再興、西郷四郎と名乗るようになる。(参考：牧野登『史伝西郷四郎——姿三四郎の実像』(島津書房)一九八三年八月) なお同書で牧野は西郷四郎が山嵐のモデルであるとする近藤の説にも言及している。) ちなみに「山嵐」は「背負い投げの変形」のような投げ方で、さほど特異な技ではなかったが、小兵の西郷四郎が駆使することで俄然効力を発揮したものだという(前掲牧野『史伝西郷四郎』第二章「七、山嵐」)。またその命名は、「山嵐」で投げられた者が山から吹き下ろす烈風のような音を聞くことに由来するという(前掲近藤『漱石と會津つば・山嵐』——第三章山嵐のモデル)。

(一〇)《嘉納さんは高等師範の校長である。其処へ行つて先づ話を聴いて見ると、嘉納さんは非常に高いことを言ふ。教育の事業はどうか、教育者はどうなければならぬとか、逆も我々にはやれさうにもない。今なら話を三分の一に聴いて仕事も三分の一位で済まして置くが、その時分は馬鹿正直だったので、さうは行かなかつた。そこで逆も私には出来ませんと断はると、嘉納さんが旨い事をいふ。あなたの辞退するのを見て益^{ます}依頼^{たか}し度^{たか}なつたから兎に角やれるだけやつてくれとのことであつた。そう言はれて見ると、私の性質として又断り切れず、とうとう高等師範に勤めることになつた。それが私のライフのスタートであつた。》(処女作追懐談「一九〇八—明治四十一年「文章世界」↓『漱石全集第二十五卷』引用は徳永による。)

(一一)《嘉納さんに始めて会つた時も、さうあなたの様に教育者として学生の模範になれといふやうな注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡した位でした。嘉納さんは上手な人ですから、否さう正直に断られると、私は益^{ます}貴方^{きほう}に来て頂きたくなつたと云つ

て、私を離さなかつたのです。(中略 原文改行) 然し教育者として偉くなり得るやうな資格は私に最初から欠けてゐたのですから、私はどうも窮屈で恐れ入りました。嘉納さんも貴方はあまり正直過ぎて困ると云つた位ですから、或はもつと横着を極めてゐても宜かつたのかも知れません。然し何うあつても私には不向^{ふむかひ}な所^{ところ}だと思はれませんでした。(中略 原文改行) 一年の後私はとうとう田舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。貴方がたは松山の中学と聞いてお笑ひになるが、大方私の書いた「坊ちゃん」でも御覧になつたのでせう。》(「私の個人主義」一九一五—大正四年三月「輔仁會雜誌」↓『漱石全集第十六卷』一九九五年四月 引用は徳永による。)

(一二)《校長は時計を出して見て、追々^{おひおひ}ゆるりと話す積^{つみ}だが、先づ大體の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から教育の精神について長い御談義を聞かした。おれは無論いゝ加減に聞いて居たが、途中からは是は飛んだ所へ来たと思つた。校長の云ふ様にはとても出来ない。おれ見た様な無鉄砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遥々^{はるばる}こんな田舎へくるもんか。

(中略) おれは嘘をつくのが嫌だから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、こゝで断はつて帰つちまはうと思つた。(中略) 到底あなたの仰^{おほ}やる通りにや、出来ません、此の辞令は返しますと云つたら、校長は狸の様な眼をぱちつかせておれの顔を見て居た。やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいゝと云ひながら笑

つた。その位よく知つてゐるなら、始めから威嚇おどろかさなければいゝのに。》(『坊つちやん』二 引用は徳永による。)

(一三) 《その一枚の方の絵には、かの維新の内乱のおり、主君のためにみずから進んで死を選んだ、十七名の少年から成る、有名な「白虎隊」の図が描いてあり、もう一枚の方は、これは油絵で、本校の漢文教授、秋月氏の肖像が描いてある。(中略 原文改行) ところで、このだだつびろい、飾りけのない部屋で教えらるる学問は、いったい何であるかという、それは柔術と申すものである。》(ラフカディオ・ハーン「柔術」 岩波文庫『東の国から——新しい日本における幻想と研究——』平井呈一訳 一九五二年 引用は徳永による。)

なお同書の註・解説によれば、『東の国から』(Out of the East) の出版は一八九五年だが、「柔術」(Jiu Jitsu) の執筆自体は一八九三年である。)

(一四) 《佐藤は其の頃筒袖に、脛の出る袴を穿いて遣つて来た。余の如く東京に生れたものゝ眼には、此の姿が頗る異様に感ぜられた。

丁度白虎隊の一人いちにんが、腹を切り損なつて、入学試験を受うけに東京に出たとしか思はれなかつた。》(『満韓とくころどころ』二十一 一九〇九—明治四十二年 ↓ 『漱石全集第十二巻』一九九四年十二月 引用は徳永による。)

(一五) 近藤は『我が輩は猫である』にも皆川正禧との交流の反映を見ている。《その失恋話の冒頭部は、「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡、筍谷を通つて、蛸壺峠をかゝつて、是から愈会津領へ出様とする所だ」と始まります。ここはどう見ても正禧の実家のある津川周辺の山村に違いありません。》(前掲『漱石と會津つば・山嵐』第三章 傍点近藤) ここで近藤が引用しているのは

『我が輩は猫である』(六) の一部だが、その直前には《僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実の所話す張合もないんだが、切角せつかくだから打ち開けるよ。》(『漱石全集 第一巻』一九九三年十二月) とある。この部分からも、漱石が東大に着任する前ラフカディオ・ハーンに教えを受けていた皆川正禧のことが漱石の脳裏にあつた可能性を推測できるだろう。

(一六) 近藤はこのことに関連して、イギリス留学中、「日本の柔術使と西洋の相撲取」の試合を見に行ったことを正岡子規(常規) に書き送つた漱石の書簡(一九〇一—明治三十四年十二月十八日付)を挙げている。また漱石は、講演「倫敦のアミューズメント」(一九〇五—明治三十八年「明治学報」 ↓ 『漱石全集 第二十五巻』) でも、西洋に渡航する柔術家の話や刀等の武器の日英比較などをしてゐる。

(一七) 《先生、失礼ですが、起きて御覧なさい」と云ふ。何でも先生の手を逆にと取つて、肘の関節つがひを表から、膝頭で圧おさへてゐるらしい。先生は下から、到底起きられない旨を答へた。上の男は、それで、手を離して、膝を立て、袴の襷ひだを正しく、居住居あずまゐを直した。見れば立派な男である。先生もすぐ起き直つた。(中略 原文改行) 「成程」と云つてゐる。(原文改行) 「あの流で行くと、無理に逆らつたら、腕を折る恐れがあるから、危険です」(原文改行) 三四郎は此の問答で、始めて、此の両人の今何をしてゐたかを悟つた。(中略 原文改行) 先生と知らぬ男はしきりに地方の中学の話始めた。生活難の事、紛擾の事、一つ所に長くとまっていられぬ事、学科以外に柔術の教師をした事、ある教師は、下駄の台を買つて、鼻緒は古いのを、着すげ更かへて、用ひられる丈用ひる位にしてゐる事、今度辞職した以上

は、容易に口が見付かりさうもない事、已を得ず、それ迄妻を国元へ預けた事——中々^{なかなか}尽きさうもない。》(『三四郎』十↓『漱石全集第五卷』一九九四年四月 引用は徳永による。)この部分が『三四郎』の物語自体とはあまり関わりがないことを近藤は指摘している(近藤前掲書第四章)。論者(徳永)も同じ印象を受けるが、『坊っちゃん』の後日談とともに山嵐が柔道家であることを種明かしするため、漱石が挿入した自作パロディと考えると興味深い。なお「明治四十四一年頃 断片四七」(『漱石全集 第十九卷』一九九五年十一月)には《柔術ノカタヲ教ハル》とあり、この経験が『三四郎』に生かされたことと近藤は指摘する(近藤前掲書第三章)。なお、『漱石全集 第十九卷』当該箇所^(註)にも同様の指摘がある。また近藤は、「明治三十四年 断片一二」(『漱石全集 第十九卷』)に《肋の三枚目辺で大きな太鼓をドンドンと叩く奴がある腹の中を弘道館の道場だと思つて居る》とあることも指摘している(近藤前掲書第三章)。たしかに、『坊っちゃん』発表(一九〇六—明治三十九年)以前に漱石が講道館柔道を明確に認識していたことを示す資料といえる。

(一八) 山嵐のモデルが西郷四郎であろうという見解は、インターネット上のコラムなどで散見される一方、著作・論文・評論などでは参考程度の言及もあまり見られず、第二項で見た近藤哲の論考は貴重である。なお、明治の作家や文化人を虚実取り混ぜて活写した劇画・関川夏央原作／谷口ジロー作画『坊っちゃんの時代』シリーズ(双葉社 一九八七〜九七年)に、山嵐と西郷四郎の繋がりを暗示するような描写はある(全五巻のうち第一巻『坊っちゃんの時代』および第二巻『秋の舞姫』)。

(一九) 柔道にも空手道のような当て身技(突き・蹴り・打ち)が型

の上では存在するが、講道館草創期からそれらは乱取り練習や試合における禁じ手であり、自然、練習もされなくなり、有名無実になったものと思われる。近代体育として柔道が全国的に普及していく経緯を分析した井上俊『武道の誕生』(吉川弘文館 二〇〇四年八月)によれば、嘉納治五郎は一八九〇年代後半には「崩し・作り・掛け」と称する投げ技の要諦を理論化しており、既にこの時、投げ技および投げ技との関連で必要となる固め技に柔道技が特化していたことを物語る。

(二〇) 前掲牧野『史伝西郷四郎』による。西郷四郎の生涯については、本書のほか、前掲井上『武道の誕生』、前掲『嘉納治五郎大系』などを参考にした。

(二一) 「國士」(一八九八〜〇三年)・「柔道」(一九一九〜一八年)・「有効乃活動」(一九一九〜二二年)・「大勢」(一九二二年)・「作興」(一九二四〜三八年)・「柔道」(一九三〇〜三八年)など。

(二二) 《大体において科学を応用して技を決定することに努めてきたから、往時の柔術諸派との優劣はおのずから明らかになり、その結果全国の修行者はほとんど皆講道館の柔道を学ぶようになったのである。かくて精神および身体^(註)の力を最も有効に使用するという原理を攻撃防衛に応用することにおいて成功したと自ら信ずるに至ったから、今度はこの同じ原理を他の方面のことに応用しても成功すべきではないかと考え、これを体育に^(註)応用してみたのである。》(嘉納治五郎『柔道神髓』一九三五—昭和十年六月 改造社「改造」第十七巻第六号↓本の友社『嘉納治五郎大系』第一巻 一九八八年)前掲井上『武道の誕生』は、嘉納が「柔術」にかえて「柔道」とした理由を以下の三点にまとめている——①伝統武術に対するイメージ

の払拭 ②根本となる「道」があり、「術」はその応用であることを明らかにする ③伝統武術を土台にはしているのでまったく新規な名称となる「柔理学」「柔理論」などはせず、一、二の流派ですでに使われていた「柔道」を選んだ——。ただし、前掲ハーン「柔術」が、熊本五高でおこなわれていた「柔道」を「柔術」(ju-jitsu)と呼んでいたように、「柔術」は柔道も古流柔術も含めた一般名詞として定着し、相当期間使われていたものと思われる。『坊っちゃん』で一度だけ出てくる「柔術」の呼称も一般名詞としての使用だろうが、嘉納治五郎や西郷四郎と直接結びつく「柔道」という呼称を特に避けたということはあったかもしれない。

(二三) なお、大東流合気柔術における最も重要な技術である「合気」は、この武田惣角が創始したものであるという説がある(参考：吉丸慶雪『合気道の奥義』ベースボール・マガジン社 二〇〇一年九月)。「大東流合気柔術」という呼称も、もともとは「大東流」であった、又はまったく違う呼称であった等々、現在も複数の系統で伝承されている大東流合気柔術諸家の間でも諸説があつて定説がないが、本論では便宜的に「大東流合気柔術」と呼称している。

(二四) 前掲牧野『史伝西郷四郎』は、「寄るな触るな西郷四郎」と一般世間でも持て囃された西郷四郎と嘉納治五郎の知名度からして、四郎の出奔はそれなりの社会的事件だっただろうと推測している(第三章「三、出奔——毀誉褒貶」)。

(二五) 西郷四郎：一八六六—慶応二年生まれ／夏目漱石：一八六七—慶応三年生まれ

(二六) 『坊っちゃん』の中で起こる事件の当事者は山嵐であり、坊っちゃんには協力者・傍観者的存在であるという見方を提示している論

考に、片岡豊「没主体性」の悲劇——「坊っちゃん」論(『立教大学日本文学』一九七七年二月↓桜楓社『漱石作品論集成第二巻 坊っちゃん・草枕』一九九〇年十二月)、有光隆司『坊っちゃん』の構造 悲劇の方法について(『国語と国文学』一九八二年八月↓前掲『漱石作品論集成第二巻』)などがある。本作で漱石がもつとも自身を投影していたのが坊っちゃんであるとすれば、小説の素材(たとえば西郷四郎)を見る観察者・認識者の視点がそのまま作中に持ちこまれたということかもしれない。

(二七) 嘉納治五郎は回想録「教育者としての嘉納治五郎」(『作興』第八巻八号一九二九—昭和四年八月↓『嘉納治五郎大系』第十巻(本の友社)一九八八年)で、熊本五高校長時代にラフカディオ・ハーンを招聘したことを《特筆すべき一事》であつたと振り返っているが、同じ連載の高等師範校長時代について述べた部分(『作興』第八巻九号一九二九—昭和四年九月↓前掲『嘉納治五郎大系』第十巻)では、漱石招聘に関して一切言及していない。この嘉納の回想録発表時点で漱石の作家としての認知度は少なくともハーンに劣るとは考えられず、言及がないのがむしろ不自然である。教育者としても知られた嘉納は、ハーンの「柔術」はもちろん、漱石作品にも目を通していただろうが、『坊っちゃん』を読んで含むところがあり、沈黙したのかもしれない。

(二八) 《坊っちゃん》の中に赤シャツという渾名を有っている人があがるが、あれは一体誰の事だと私は其時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時其中学に文学士と云つたら私一人なのですから、もし「坊っちゃん」の中の人物を一々実在のものと認めるならば、赤シャツは即ちかういふ私の事にならなければならぬので、——甚だ

有難い仕合せと申上げたいやうな訳になります。》(夏目漱石「私の個人主義」↓『漱石全集 第十六巻』)

(二九) ちなみに嘉納治五郎は一八六〇―万延元年、摂津国(現在の神戸市)に幕府海軍管材課長・嘉納次郎作希芝の三男として誕生している。戊辰戦争でいえば「賊軍」の立場になるが、『坊つちゃん』における校長―狸の出身地は不明であり、嘉納の出自が生かされているとはいいたい。

(三〇) 『鼎談』半藤一利・小森陽一・石原千秋(前掲『漱石研究』第二十号所収)における発言。

(三一) 《山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞をやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構はず、ステッキを持つて来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演じて居る》(『坊つちゃん』九)

(三二) 全文の読み下し文は以下である。《踏み破る千山万嶽の煙 鸞輿今日何れの辺にか至る 単蓑直ちに入る虎狼の窟一ヒ深く探る 鮫鰐の淵 報国の丹心独力を嗟き 回天の事業空拳を奈せん 数行の紅涙両行の字 桜花に付与して九天に奏す》(妻木正麟『詩吟・剣舞読本』(日本文芸社 一九六二年)による。)

(三三) 「弘道館」という名の藩校を持っていた藩は、水戸藩の他にも彦根藩、佐賀藩があるが、徳川御三家である水戸藩のそれが最も知られていたと思われる。桜田門外で暗殺される井伊直弼が彦根藩出身なのは歴史の皮肉というものだろう。

(三四) 『日本のうた 第一集 明治・大正』(野ばら社 一九九八年)による。同書によれば、この歌は一八八八―明治二十一年頃作られ

た日清戦争の「仮想歌」である。なお『漱石全集第二巻』―『坊つちゃん』の当該箇所(註にある『欣舞節』の歌詞は『日本のうた 第一集』のものと同がある↓『日清談判破裂して 品川乗出す吾妻艦 続いて金剛浪花艦 国旗堂々翻し』。少なくとも二通りの歌詞(バージョン)があるということだが、ここではいずれの歌詞でも最初に歌われる戦艦ということで「吾妻艦」を中心に解釈をおこなう。ちなみに上記『漱石全集』と同バージョンの歌詞を挙げている江藤 淳『漱石とその時代 第一部』(新潮選書 一九七〇年)を参照すると、本論本文で挙げたバージョンに「続いて金剛浪花艦 国旗堂々翻し」の部分が後に加えられたものと思われる。(『漱石全集』の註は上記引用の部分のみで「ちゃんちゃん坊主」のくだりまで掲載しておらず、『坊つちゃん』本文の解釈を助けるものとは言いがたい。)

(三五) 半藤一利『漱石先生ぞな、もし』(文藝春秋 一九九二年)半藤は、二代目「吾妻艦」が日露戦争に参加したことにも言及している。なお森田草平は、「吾妻艦」という軍艦は日清戦争当時存在せず、《品川乗り出す吾妻艦》は台湾戦争(徳永註：一八七四―明治七年の台湾出兵を指す)のことだと、さる物識が教えてくれた》と述べている(『坊つちゃん』と『草枕』東亜出版社『漱石の文学』一九四六年 所収↓社会思想社現代教養文庫 一九五四年二月)「東艦」吾妻艦」の名の由来、経緯については浅井将秀・編『日本海軍艦船名考』(東京水交社 一九二八年)も参照した。

(三六) 前掲『坊つちゃん』の系譜学。なお小谷野は同論で、坊つちゃん・山嵐に近い立場のうらなりからマドンナを赤シャツが奪おうとする展開を明治維新に当てはめると、マドンナ＝天皇になると

し、また、うらなりが坊ちゃんから「君子」「聖人」と呼ばれ《不思議なほど持ち上げられている》としている。論者（徳永）もマドンナ＝天皇という図式を興味深く思うが、だとすると、マドンナと当初婚約関係にある「君子」うらなりは、幕末における幕府の公武合体政策で皇女和宮と政略結婚しすぐ夭折した十四代將軍・徳川家茂があてはまるのではないかと思う。家茂は生来病弱であり、顔色が悪い（二）といううらなりの外見のイメージとも通ずるものがある。

(三七) ちなみに、西郷四郎の義父である近慮の家系・会津西郷家は九州から発しており、薩摩の西郷隆盛と遠祖では繋がっている。このことも関係してか、明治時代になって以降近慮と西郷隆盛は親交があり、西南戦争の折には近慮も謀反の疑いをかけられ、福島県都々古別神社の神官を免職になっている（前掲牧野『史伝 西郷四郎』第二章「六、保科近慮・四郎の改姓」）。また、西郷四郎は東洋日の出新聞の記者時代、辛亥革命（一九一一―明治四十四年）の現地記事の記名で「北洲」と名乗ったことがあった。西郷隆盛の号「南洲」をふまえたのだろう。一方、父のところに来た西郷隆盛の手紙を「われは会津の北洲なり」と破り捨てたこともあったという（『史伝 西郷四郎』第五章「八、四郎の辛亥革命通信」）。これらのことから、会津の仇敵でありかつ「最後の侍」としての西郷隆盛に対する西郷四郎の複雑な感情が見てとれる。

(三八) 「ロンドン体験としての「坊つちゃん」」（『文学』一九八九年九月↓前掲『坊つちゃん』の世界）

(三九) 「池辺君の史論に就て」（池辺吉太郎『明治維新三大政治家』再版序）一九二一―明治四十五年五月↓『漱石全集 第十六巻』

(四〇) 『歴史への招待』⑧（NHK 一九八一年）所収のコラム。漱

石と山嵐をつなぐ線として皆川正禧にも言及している。近藤哲「皆川正禧と夏目漱石」（阿賀路の会「阿賀路」第二十二集 一九八二年三月）よりも言及が早い。牧野も「阿賀路」の執筆者の一人であり――近藤「皆川正禧と夏目漱石」所収の「阿賀路」に牧野は「評伝 西郷四郎V」を執筆している――、英文学者である近藤と歴史研究者である牧野の間で情報交換があったものと思われる（近藤『漱石と會津つば・山嵐』のあとがきによれば、皆川正禧が会津人であることに着目したのは近藤である。）

(四一) 『それから』の平岡常次郎のネーミングに関して、平岡敏夫は漱石の幼なじみ・日根野れんの夫となった平岡周造、また、漱石の東大予備門時代の旧友・平岡定太郎（三島由紀夫の祖父）に言及している（ある佐幕派子女の物語――「道草」「それから」にふれて）『山梨英和短期大学創立三十周年記念日本文学の系譜』一九九六年十月）および「それから――三十年代・御縫・文鳥の女――」（『国文学』一九九二年五月）↓『漱石 ある佐幕派子女の物語』（おうふう 二〇〇〇年一月）。平岡定太郎については常次郎への転化が考えられるという注目すべき見解もみられるが、ここに富田常次郎という要素が加わっていた可能性もあるだろう。

(四二) よしだまさし『姿三四郎と富田常雄』（本の雑誌社 二〇〇六年二月）によると、『姿三四郎』のネーミングは「語呂がいいから」といった「適当な理由」で付けたタイトルだったと富田常雄は述懐している。

その他の主要参考文献（年代順）

富田常雄『姿三四郎 決定版』（講談社一九五〇年十一月）

江藤淳『漱石とその時代』第一部～第五部（新潮選書 一九七〇～九九年）

三好行雄・編『別冊國文学三九 夏目漱石事典』（學燈社 一九九〇年）

竹盛天雄・編『夏目漱石必携』（學燈社 一九八一年三月）

竹盛天雄・編『夏目漱石必携Ⅱ』（學燈社 一九八五年二月）

飯塚一陽『柔道を創った男たち』（文藝春秋 一九九〇年八月）

出久根達郎『漱石先生とスポーツ』（朝日新聞社 二〇〇〇年十二月）

小田切靖明／榊原鳴海堂・編『夏目漱石の研究と書誌』（ナダ出版センター 二〇〇二年七月）

※ 漱石作品の引用は、岩波書店『漱石全集』（平成版）に拠った。ルビ、くり返し記号などは適宜省略した。特に「坊っちゃん」の表記については、引用部分および作品名としては「坊っちゃん」とし、それ以外の部分では「坊っちゃん」とした。

※※ 引用部分の省略、傍点等の指示はゴシック体で示した。

※※※ 和暦については必要と思われる場合のみ使用した。